

一九六八年スウェーデンのストックホルムで、ノーベル文学賞の授賞式が行われました。受賞者は、文豪川端康成^{かわばたやすなり}。受賞の後、『美しい日本の私 ~その序説』という演題で講演が行われ、その冒頭に、道元禪師の和歌がよまれました。一番有名な道元禪師の和歌ですのでご存じの方も多いのではないのでしょうか。

「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すずしかりけり」

『本来の面目』^{ほんらい めんもく}という題名の和歌です。「本来の面目」とは禅の言葉で、“本来持っている真実の姿”というような意味になります。また“本来の自分”と言い換えてもよいかもしれません。

昭和の曹洞宗を代表する禅の指導者である澤木興道^{さわきこうどう}老師は、「本来の面目」のこを、「自分が自分で自分する。めいめい自分であればそれで良い」と解説し、「坐禅は本来の面目である。この歌をそのまま読めばすなわち一切がことごとくこれ現^{げん}成公案^{じょうこうあん}、本来の面目である。」と述べられています。

“現^{げん}成公案^{じょうこうあん}”とは、仏の教えのとおり修行すること、そのこと自体が、真実の現れである、ということです。

また、曹洞宗に宗歌^{しゅうか}という曹洞宗の歌があります。その宗歌の後半部分にも、道元禪師の和歌が引用されています。

「荒磯^{あらいそ}の 浪^{なみ}もえよせぬ 高岩^{たかいわ}に かきもつくべき 法^{のり}ならばこそ」

荒波が打ち寄せる海岸の、波も寄せ付けられないほどの、ひときわ高くそびえ立つ岩に、海苔^{のり}がついている。考えてみると仏の尊い教えであればこそ、学ぶのに多くの困難が伴う。しかし海苔^{のり}が高岩^{たかいわ}につくように、その教えを求め伝えようとする人々によって、書き尽くし、書き残そうとする努力が積み重ねられ、仏^{ほとけ}の教えは、正しく伝わるのです。

この和歌の題名は、『教外別伝^{きょうげべつでん}』^{ほか}といます。これも禅の言葉で、教えの外に別に伝えると書いて「教外別伝」といいます。

この宗歌は、インターネットの曹洞宗のホームページで聞くことができますので、ホームページの中にある検索から探してみるか、お近くの曹洞宗寺院で、お尋ね^{たず}になってみてください。